羞恥の方程式

朱鷺 作

そう言えば、中学生の頃、男子の間で心理テストが流行ったよな。

聖也は、ふとそんなことを思い出していた。

それは『あなたは重病の可能性があります。お医者さんに、肛門を診察してもらうか、ウンチの検査をしてもらうか、どちらかを選ばなければなりません。どちらを選びますか?』というものだ。

究極の選択なのだが、実はその裏には女の子に質問して、答えがウンチだったら処女、肛門だったら非処女、という判定が出来るというものだった。

それが本当なのかどうなのかは判らないが、確かに一度性体験をしてしまえば、身体を診せることの心理的抵抗は少なくなるのかもしれない。

そういう意味では、自分の排泄物を診られる方が、より恥ずかしく感じるのは、ありそうな話だ。

あの娘は、どうなんだろう?

もちろん、恥ずかしがり屋だから、どちらも死ぬほど恥ずかしがって抵抗するだろう。

でも命に係わるような病気だとしたら?

どちらも拒んでそのまま病気を重くしてしまいそうな気もする。

とりとめもなくそんなことを考えながら、聖也はいつもの場所に向かった。

そこにはいつものように彼女が立っていた。

聖也が軽くうなづくと、彼女は嬉しそうな表情で聖也の方にやって来る。

こんな関係は、もう半年以上になる。

実は聖也は彼女の名前も知らない。 月に数回、ここで会ってホテルに行くだけの関係だ。

きっかけは、彼女が聖也に声を掛けたことから始まった。

この通り付近は、若い娘たちが集まることでも知られていた。

昔から援助交際とかパパ活とか、最近だとトー横女子だとか、呼び名は変わっても、早く言えばウリ、売春行為をする娘たちだ。

仕事帰りの金曜日の夕方、聖也はこの辺りを通りがかった。

https://www.spaceginga.com/
SPACE銀河

別に若い娘を漁っていたわけではない。 単に通り道だっただけだ。
いかにもという感じの派手なメイクをした娘たちが群れているのを、横目で眺めながら歩いていた時に、
その一群からちょっと離れた所に佇んでいる一人の娘と目が合ったのだ。
ちょっと寂しげな表情で、派手なギャル達とは離れて一人で居るのを、聖也は不思議に思いながらも、目が合ったのだからその娘に向かって微笑んだ。
するとその娘は聖也の方に寄ってきて、恥ずかしそうにうつむきながら小さな声で聖也に言った。
「あの、私と遊んでくれませんか?」
聖也はちょっと驚いた。
場所も場所だからそういう娘が居ることは想像できるが、この娘はどう見てもそういう事をする娘には見えない。
ためらった末に出たのは、こんな言葉だった。
「遊ぶのは構わないけど、その、遊ぶって言うのはセックスをして、お小遣いをもらいたいっていう話なのかな?」
娘は、恥ずかしそうにうつむいたまま、小さくうなづく。
個人的な趣味で言えば聖也の好みのタイプだ。 聖也には特定の恋人も妻も居ないし、拒む必要はない。
でもこんな娘が売春するのかと思うと、複雑な心境にもなる。
「ダメですか。」
娘は、小さな声で再びたずねる。
たまたまこんな機会が有って、この娘に声を掛けられたのだか、これも運命だろう。
そんなふうに思って、聖也はうなづいた。
「いいよ。君みたいな娘に誘ってもらえるなんて、嬉しい話だ。」

聖也は26歳。 一人暮らしの会社員だ。
大学入学でこの街に来て、そのままこの街で就職した。
学生時代に恋人も居たことはあるが卒業と同時に遠距離になり別れてしまい、それ以降は女っ気は無い。
若い娘を買ったところで、法的にはダメな事だろうけれど、誰からも責められることもない。
きちんと仕事もしてるし、ギャンブルや遊びに浪費するわけでもないから、金にも困っていない。

https://www.spaceginga.com/
SPACE銀河

いつも欲求が溜まると、ネットのアダルト動画でも観ながらのオナニーばかりだったから、たまには生身の女と一戦交えるのも良いだろう。
こんな娘と行きずりのセックスも運命のいたずらだろうと考えたのだ。

「行こうか。」と言って歩き出すと、おとなしく後からついてくる。
派手系のギャルのように、いかにもという相手と腕を組んでホテルに向かうような、なれなれしい仕草も見せない。
『どうしてこんな娘が？』と聖也は疑問に思いながらも、ホテルに入った。
ちょっと心配したのは、どこかから怖いお兄さんが出てきたりする事だったが、この娘の雰囲気からすると、無さそうに思えた。
ホテルの部屋に入って鍵を掛けてしまえば、よっぽど計画的な組織としての犯行でもなければそれもないだろう。
ホテルは、聖也がきまぐれに入った所だ。
後々に、不同意だとか言われると面倒なので、『私は自分の意思で、同意の上でセックスをします。』というセリフを言わせ、聖也のスマホのボイスレコーダーに録音した。
名前も言わず日付もない声に、どれだけの証拠能力が有るか判らないが、まあそんな心配も無いだろう。
「こんな事までする相手なんて、今まで居なかったかな？」
笑いながら彼女に訊ねると、意外な答えが返って来た。
「あそこに行ったのは、今日が初めてなの。話は聞いていたけど。それで、最初に会ったのがあなたなの。だから、今までこんな経験は無いの。」

部屋のベッドに彼女を座らせると、妙に弾力があり、弾んだ拍子にスカートがめくれ上がる。
恥ずかしそうに頬を赤らめ、スカートを押さえる娘に、違和感を覚える。
今から、そのショーツを脱いで、その中の秘所を晒し、そこに聖也のモノを受け入れるのに、それを見られるのに羞恥を覚えるのは、矛盾しているように思ったのだ。
聖也はちょっと意地悪な気分になって、スカート捲りをしてみた。
驚く様子でスカートを押さえ、恥ずかしがる彼女は、ある意味で新鮮さを感じさせる。

https://www.spaceginga.com/
SPACE 銀河

「今から、それを脱ぐんだろう。そんなに慌てなくても良いじゃないか。」
「そうだけど…」
彼女は、恥ずかしそうに答える。
もうちょっとからかってみたくなって、
「じゃあ、僕が一枚づつ脱がせてあげよう。」
そう言うと、彼女は黙ってうつむく。
聖也は彼女を立たせ、一枚づつ服を脱がせる。
上着とブラウスを脱がせ、スカートのホックを外し、ストッキングを下ろし、ブラジャーとショーツだけにした処で、彼女が抵抗する。
「こんなの恥ずかしい。」
「だって、ビキニの水着で、海辺で遊んでるのと同じじゃないか。」
「でも、やっぱり下着だし、恥ずかしいよ。」
そう言って、頬を染めてうつむく彼女は、どう見ても売春をするような娘には見えなかった。
「お願い。この後は自分で脱ぐから。お願いだから、灯りを消して。」
泣き出しそうな表情で聖也に懇願する姿は、とても可愛く思えた。
彼女のお願い通りに灯りを消し、オレンジ色の小さな常夜灯だけを残す。
それでも不安そうに、下着姿のままでベッドの中に潜り込み、そこでブラジャーとショーツを脱ぎ、聖也の方に向かってうなづく。
聖也は全裸になり、ベッドの中の彼女を抱き、ホテルの御休憩の時間を過ごした。
行為の後で一緒にシャワーを浴びようと誘ったが、恥ずかしいからと拒まれた。
聖也が一人でシャワーを浴びて出てくると、もうきちんと服を着て、隙の無い格好になっていた。
もしかして、帰る場所も無いのかと思い、それを聞くと、一人暮らしの部屋が有るという。
小遣いはどのくらい欲しいのと訊ねると、いくらでも良いとの事。
お金を目当てで身体を売るような事をしているにしては、欲の無い返事だった。
金額にはちょっと迷ったが、渋沢一枚を渡した。
セックスはしたが、彼女の反応は薄く思えた。

https://www.spacegiga.com/
SPACE 銀河

でもこっそり彼女の様子を観察すると、奥歯を喰い締め、声を押し殺しているようだ。
鼻での呼吸は、激しくなっている。
快感を表現したり、気づかれたりするのも恥ずかしいのかもしれない。
聖也が一人で勝手に快感を味わっているだけのようで、せっかくこんな可愛い娘としてるのに、ちょっとつまらない気分もあった。

次の週末に同じように同じ場所を通りがかった聖也は、また彼女がそこに立っているのを見つけた。
中年の親父に声を掛けられ首を横に振ってうつむいている。
聖也を見つけ、嬉しそうに駆け寄って来る彼女を見ると、まるで恋人との待ち合わせのようにも見える。
「また遊んでくれますか?」
そう訊かれて、ちょっとためらってしまう。
容姿は好みだし、セックスをさせてくれるなら多少の金額を出すのは構わない。
でもこうやって街角に立っているっていうことは、聖也以外の誰かにも、同じようなアプローチをしているのだろう。
そう思うと、素直にうなづくのも考えてしまう。
「あれから、初めてここに来たの。もしかしたら、またあなたに会えるかと思って。」
そう言われると、拒むのもためらってしまう。
結局、聖也は再び彼女とホテルに向かうことになった。

ホテルでは、相変わらず恥ずかしがり、灯りを消して欲しいと言うが、今回は灯りを点けたままで、ベッドに入った。
正常位で交わりながら、彼女の表情を観察していると、やはり感じていないのではなく、声を出したりしないように、自分を押さえているように見える。
聖也に気づかせないようにしているようだ。
聖也は途中で体位を変え、横向きに寝かせた彼女を背中側から抱きしめ、モノは彼女の中に入れたままで、胸に手を伸ばす。

https://www.spaceginga.com/
SPACE 銀河

柔らかな胸を揉みながらその先端を指で摘まむと、彼女は小さく声を上げた。
首筋にキスをしながら乳首を弄っていると、彼女の息遣いが徐々に激しくなる。
一方の手で胸を弄りながら、もう一方の手を下に動かす。
臍の周囲を撫で秘所に進み、秘密の核を摘まむと、彼女の全身が緊張しブルブルと震えるのが感じられる。
「気持ち良いかい？このまま気持ち良くなっちゃっても良いんだよ。」
彼女の耳元にそう囁いて更に刺激を続けると、彼女は全身を硬くして、絶頂に達したようだった。
それを感じて、聖也自身からも快楽の証が放出される。
二人はしばらく、そのままの体勢で快楽の余韻を愉しんでいた。
「こんなの初めて。」
彼女が呟く。
「いままでだって、セックスしたこと有るんだろう？」
「うん。でもこんなに気持ち良いなんて…」
その晩は、お互いに幸せな気分でホテルを後にした。もちろん、聖也は前回と同じ額を彼女に渡した。

それからも、週末になるとあの場所を訪れ、彼女とホテルに行くことが重なった。
たまには、聖也が残業だったり外せない飲み会だったりして来られなかったり、彼女も都合が悪くて現れなかったりしたこともあったが、月に数回は会うようになっていた。
彼女の問わず語りの話を合わせると、彼女の初体験は高校時代の同級生で、お互いに初めて同士だったとのこと。
彼が彼女の中に入れて射精するだけのセックスで、最初は痛いだけで慣れてからも、肌が触れ合って暖かいとか気持ち良いとか、あそこに入れられてなんだかムズムズと変な感じくらいで、絶頂感を味わったことは無かったらしい。
「だから、あなたが初めての人みたいなものなの。ゆっくりと入れてゆっくりと動いて、私が気持ち良くなるなんて、今までなかったの。」と笑う。

https://www.spacegingo.com/
SPACE 銀河

そうやって、何度も会っていると、恋人同士のような錯覚に陥る。
ホテルに入る前に軽く食事をしたりすることもあったし、いつもの時間に遅れそうになった彼女が、息を切らせて走って来ることもあった。
時には、帰りたくない気分で朝まで一緒に戯れて過ごすこともあった。

「高校時代に初体験を済ませたとしても、そんな程度で、あんな処で身体を売ろうと思ったの？」
「そうね、おかしいよね。お金が目的っていうわけでもなかったの。誰かと一緒に居たい、肌の温もりが感じたいっていうのかな。」
「普通は、彼氏を作るとか、考えるんじゃないの？」
「今、女の子ばっかりの大学に居るんだけど、学校では講義を受けるだけで、クラスメートとかと親しくなるような事もないし、彼氏なんて出来そうもなかったの。でも街を歩いていても男の子から声を掛けられるような事もないし、彼氏なんてどうやって作れるのか、わからないの。」
「まあ、ああいう場所に居ればセックス目当てで集まって来る男は多いだろうけどね。」
「特定の彼氏でなくても、その場限りで暖めてくれるだけでも良かったの。約束したり、喧嘩したり、一人の人と付き合うと煩わしいこともあるでしょう。」
「でも、だからって身体を売るなんて、危険だよ。」
「あなたも優しいわね。私の事を買ったのに。身体目当てで好きに遊んで良いのに。」
「まあこんなに慣れちゃって気持ちの良いセックスが出来るんだから、ちょっとは心配もするよ。」
「ありがとう。でも、心配しなくて大丈夫よ。一番最初があなただったから、それ以外の人とは遊んでないわ。あなた専属の売春婦なの。」
「そういうのは、援助交際って言うのか、パパ活って言うのか、何だろうね。」
「パパって呼ぶには、若すぎる気がするけどね。」
そう言って、彼女はまたクスクスと笑う。
二人は、そうやって肌を重ねて同じ時間を共有していった。
彼女はセックスに関しては素直だったが、かなりの恥ずかしがり屋で、何回ホテルで会っても、下着姿を見られるともじもじするし、裸になるのには抵抗した。
どうやら彼女の羞恥は、肌を合わせることより、視線に晒される方が大きいらしい。

https://www.spacegiga.com/
SPACE銀河

そう気づいてから、聖也はホテルの部屋では灯りを消さなくなった。
裸を見られるのも恥ずかしいが、乱れた表情を見られるのも恥ずかしいようで、快感が高まったり絶頂に達したりするときも、歯を食いしばったり親指を噛んだりして、堪えているようだった。
そしてもうひとつ聖也が気付いたのは、そうやって恥ずかしがったりした時の方が、快感が大きくなるらしく、乱れ方が激しくなるのだ。

いつもホテルでは、聖也が彼女の服を一枚ずつ脱がすことから始まる。
ブラジャーとショーツの姿までは、もう慣れたようだ。
その先を脱がせようとすると、彼女は恥ずかしがり、ベッドの中に潜り込んでしまう。
その後を追うように聖也もベッドに入り、彼女が自分で脱いだり、聖也が脱がせたりと、戯れのような前戯のような絡み合いになる。
聖也は彼女を恥ずかしがらせようと、正常位で交わりながら快感の表情を浮かべている顔を眺めるような事もした。
また、わざと胸への愛撫をしながら舌も這わせたりもした。
もちろん、乳首を刺激するのと同時に、その胸をよく観察するのも目的だ。
彼女は、そういう些細な行為も恥ずかしがったが、聖也は『僕は君を買ったんだからね。』と言いながら、徐々にそういう行為に慣れさせていった。
やがて、彼女はベッドの外でも全裸になり、恥ずかしそうな表情で、胸と下腹部を手で隠しながら、その姿を聖也に見せてくれるまでになった。
もちろん自分から脱ぐのではなく、聖也が脱がせるのだ。
ある時は、聖也のモノを彼女に握らせ、手の刺激だけで発射したこともあった。
男のモノをまじまじと見たり、手に握ったりするのも初めての事のようで、それもかなり抵抗を示したが、恥ずかしがりながらも、聖也の言うことに従った。

次の段階では、正常位で交わる直前に、彼女の膝を抱えM字に開脚させ、秘所を眺めようとした。
その時彼女は顔を手で覆って、泣き出してしまった。 別に女のアソコを見たかったわけでもない。
ネットでは無修正のAVがいくらでも流れているし、今までに何度か実物を見たこともある。

https://www.spacegingo.com/
SPACE銀河

そうやって、彼女を恥ずかしがらせるのが、狙いだったのだ。
最初は泣き出してしまったのですぐに止めたが、何度か試みているうちに、彼女も覚悟が出来たのだろう、あまり抵抗しなくなった。
恥ずかしがって、頬を染めるのは相変わらずだったが。
そうやって、彼女に羞恥を与える行為はエスカレートして行った。
乳首に舌を這わせ、そのまま臍まで下がり、膝を左右に割りながら秘所にまで迫り、舌で核を刺激し、甘噛みしながら、指はアソコに挿入し、彼女を感じさせるような事もあった。
彼女は恥ずかしがりながらも激しく乱れた。
時には彼女を買って、快感を与えてもらうはずの立場なのに、彼女に快楽を与えていることにを疑問に思うことさえあったが、それは征服欲とか支配欲だろうと、自分でも考えていた。
彼女の秘所をオープンして眺めることが出来るようになって、それよりも恥ずかしいことをあれこれと考えるようになった。
彼女を四つん這いにしてバックから貫き、その最中に行為を一時中断して、後ろから彼女の秘所を眺めることもした。
高く突き出したお尻の中心に、聖也のモノを今まで受け入れていた穴が、息をしているようにぽっかりと開き、その上にはつつましい菊の蕾が見える。
彼女は最初、そんなポジションで見られていることに気付かなかったが、聖也がそこに息を吹きかけると、見られていることに気付き大慌てで布団に潜り込んだ。
そうやって戯れて恥ずかしがらせ、彼女を乱れさせるのが、聖也の愉しみになっていた。
二人の関係は恋人同士なのか、セックスフレンドなのか売買春なのか、曖昧なままで半年が過ぎていた。
逢ってセックスして、お金を渡すことは、相変わらずだった。

ある週末、いつものようにいつもの場所で落ち合った彼女は、ちょっと沈んだ様子だった。
「ごめんなさい。今日はあなたとセックス出来ないの。」
「どうしたんだい。」

https://www.spaceginga.com/
SPACE銀河

「今日は、毎月来る女の子の日なの。」
「それは残念だ。今まではタイミング良く、こういう事が無かったんだね。」
「そうなの。今月はちょうど週末になっちゃって。」
「まあ、いいさ。いつもセックスだけじゃ、変わり映えしないだろう。」
聖也がそう言うと、彼女は安心した表情になる。
今までセックスだけで繋がってきたから、それが出来ないと冷たく扱われるのでは、と気にしていたようだ。
聖也は、まったく別の事を考えていた。
「じゃあ、君のあそこに僕のモノを入れないで、いやらしい事をしようか？」
「そんなこと…」
先日、頭に浮かんだことを実際に試みてみるチャンスなのだ。
身体を観られることと、身体から出たものを観られることは、どちらが恥ずかしいだろうと考えた時に、一番恥ずかしいのは何だろうと思ったのだ。
鼻水、涎など、身体から出るものを観られるのはどれも恥ずかしいだろうが、やはり下半身からのものが一番の羞恥の対象だろう。
おしっこ、うんち、経血の三つが思い浮かんだのだ。彼女が生理中なら、それを観るチャンスだろう。
「一緒に居られるのは嬉しいけど、いやらしい事ってどんな事するの？」
「それは、まだ秘密。」
どうやら彼女は、先日の手での射精が思い浮かんだようで、今度は口での行為をさせられるのではと、考えたようだった。
「今日は特別にいつもの倍のお小遣いをあげるよ。だから僕の部屋に来ないか？」
「良いわよ、いつもホテルだものね。あなたの部屋に行くのは初めてだし、どんな部屋なのか興味もあるから。」
「男の一人暮らしだから、きれいな部屋じゃないけどね。」
聖也の部屋まで来て、部屋に入る時に、彼女は郵便受けに書いてある名前を読む。
「松木聖也。せいやさんっていう名前だったのね。」

https://www.spacegiga.com/
SPACE銀河

「そう言えば、半年もこんな関係なのに、お互いに名前も知らなかったね。」
「そうね、名前も住所も連絡先も知らなくて。どちらかがあの場所に行かなくなれば、それでお終いになっちゃうような関係なのね。」
「でも、もう君は僕の名前も住所も知っちゃったわけだ。」
「私の名前は、冴子。村西冴子っていうの。」
「源氏名じゃなくて本名かい？」
そう言って聖也は笑う。
「馬鹿ね。あなた以外相手にしないのに、偽名を使ってどうするの。」
冴子もそう言って笑う。
「どちらも、イニシャルは同じだね。」
聖也は、部屋の鍵を開け、冴子を招き入れる。
「わりと広いし、きれいな部屋じゃない。」
初めて見る男の部屋を、物珍し気に見回している。
窓側にダイニングスペース、奥にベッドが有るワンルームの部屋だ。
「広目だけど、築年数が古いから家賃は安いんだ。隣は今、空室になっているから、君が乱れて大きな声を出しても大丈夫だよ。」
そう言うと、
「今日は、あなたがよがり声を出すんじゃないの。」と笑う。

いつものように、冴子の上着を脱がせ、ブラウスのボタンをひとつづつ外すと、冴子も聖也のシャツのボタンを外し、お互いに脱がせ合う。
冴子も今日は積極的だ。
いつもは自分が責められる立場なのに、今日は自分の方が聖也を責める立場になると思っているのだろう。
聖也がトランクスだけになり、冴子はブラジャーとショーツだけを残した姿になる。
ここまでは、何度も経験してもう慣れている姿だ。
冴子は、聖也のトランクスを自分の手で脱がせて良いものかと、ためらっている。

https://www.spaceginga.com/
SPACE 銀河

聖也は、冴子のブラジャーも外してしまう。いつものように、冴子は手で胸を隠す。
「それを脱がないの？」
冴子は聖也のトランクスを指す。自分の手や口で、聖也を満足させる覚悟は出来ているようだ。
「いや、僕のじゃなくて、君のを脱がせてあげるよ。」
最後の一枚のショーツは、生理用らしくいつもより大きめで地味な感じで、生地も相応なもののようだ。
「ええ、これを脱ぐの？だって…」
「今日はあの日なんだろう。君のあそこから血が流れてるのを観てみたいんだ。」
「ヤダッ。それだけはやめて。そんな恥ずかしい事。」
冴子は抵抗するが、聖也は冴子を抱きしめながら、その最後の一枚を下ろしてしまう。
脱がせたショーツには、血のようなものは見えない。
冴子は胸と下腹部を手で隠しているが、その手の下に一本の紐が見えている。
「血なんか出てないじゃないか。」
聖也は脱がせたショーツを手に取って、わざとらしくそんなことを口にする。
「それは…」
冴子は羞恥で真っ赤になっている。
「それは何？」
「タンポンを使ってるから…」
小さな声で答える。
「じゃあ、そのタンポンを外したらどうなるの？」
「溜まってる血が流れ出して来ちゃう。」
「それを見たいんだよ。」
「恥ずかしい。」
「ここで、その紐を引っ張ってタンポンを抜いても良いかな？」
「ダメ。部屋が血で汚れちゃうよ。」
「じゃあ、トイレか浴室かに行こうか。」
「どうしても見るの？」
「そうだよ。こんな機会はめったにないからね。血で汚れても構わないように、僕の部屋に連れて来たん

https://www.spaceginga.com/
SPACE 銀河

だ。」
「最初から、そのつもりだったのね。」
ホテルの部屋を経血で汚せば、クリーニング代だのなんだの、面倒なことが増える。
それに、聖也にはさらにもう一つの企みがあった。

冴子は、聖也に肩を抱かれるようにして浴室に連れて行かれる。
最初からそういう計画だったと聞いて、観念したようだ。
洗い場に寝かされ、膝を立てて開かされ、開いた脚の間に聖也が座る。
秘所は全開で、以前の冴子ならば泣き出してしまうところだ。
しかし今回はもっと恥ずかしいことが待っている。その部分から出ている紐を聖也が手にする。
「ああ、恥ずかしい。そんなの見てもグロテスクなだけよ。」
「グロテスクでも何でも良いんだ。君の事なら隅から隅まで見てみたいだけなんだから。」
聖也は、そう言いながらゆっくりとタンポンの紐を引く。冴子は恥ずかしさで、手で顔を覆ってしまう。
赤く染まったタンポンが、冴子の秘所から現れ、それに続いて溜まっていた経血がダラダラと流れ出してくる。
「毎月、こんなふうに血を流してるんだね。」
「恥ずかしいから、そんなにじっくり見ないで。」
聖也は血に染まった秘所に指を伸ばし、いつもと同じように愛撫を加える。
「指が汚れちゃうよ。」
「大丈夫だよ。汚れたら洗えば良いんだから。」
そう言いながら、血まみれの指で核に刺激を与えると、冴子の息遣いが徐々に荒くなる。
普通に秘所を開かれ愛撫される時よりも、経血に塗れたソコを嬲られることで、異常な感覚が生まれているのだろう。
たちまちのうちに、冴子は達してしまった。

荒い息を静めている冴子を抱き起し、シャワーで経血の汚れを洗い流し、タオルで拭いてさっぱりさせてやると、冴子はようやく落ち着きを取り戻した。

https://www.spacegaga.com/
SPACE銀河

浴室の床も、シャワーで流し、きれいにして二人はベッドに戻る。
タンポンを抜いてしまったので、部屋やベッドを汚さないかと、冴子はしきりに気にする。
聖也は、ティッシュペーパーを数枚、冴子のあそこに当てるが、うっすらと一筋の赤色が付いた程度で、ベッドのシーツが汚れるほどでもない。
「大した事なさそうじゃないか。」
「こんなちょっとの間だからね。これで、朝までこのままで寝ていたら、シーツに赤い染みが付いちゃうのよ。」
「やっぱり、入れてみたいな。」
「入れても良いけど、あなたのアレも血まみれになっちゃうわよ。」
「ちょっとの間ならそれほどにならないだろう。」
「さあ、そんな経験はないから判らないわ。」
冴子はショーツを履きたがるが、聖也はそれを止める。
「それより、ちょっとの間もっと別のいやらしいこともしたいな。」
「これ以上、何をするつもりなの。」
今度こそ、聖也のモノを手と口で受け入れるのだろうと、冴子は思った。
聖也は、冴子に四つん這いでお尻を上げたポーズを取らせると、お尻の穴を指で撫でる。
そんな処を見られたり触られたりするだけで恥ずかしさがこみあげ、冴子の頬は紅潮してしまう。
『まさか、アナルセックスをしようと思ってるのかな。』お尻の穴でするセックスもあるとは知識として知っていたが、自分にそんなことが出来るとも思えなかった。

聖也は、風邪薬やカットバンの入った薬箱のようなものの中を、がさがさと何か探している。
そして何かが入った小さな箱を取り出す。
「それ何？」
「こんなものなんだけどね、何だか判るかな？」
聖也が取り出して冴子に見せたものは、イチジク浣腸だった。
冴子は、初めて見るそれが何だか解らなかったが、ピンクの色と丸みを帯びた形で、何かいやらしい道具に思えた。

https://www.spacegingo.com/
SPACE銀河

「解らないわ。何かいやらしい道具かな。」
「まあ、ある意味でいやらしいかもね。これはお薬なんだよ。」
「お薬なの？」
「そう、かんちょうって言うんだよ。」
その名前を聞いて、冴子はちょっと驚く。 浣腸っていうのは聞いた事が有った。
便秘の薬で、お尻の穴から入れるとすぐに効くっていう話を、同級生がしていたのだ。
冴子自身は便秘には縁が無い体質だったので、実際には見たことも使ったこともなかったのだ。
「初めて見た。私にかんちょうするの？」
「そうだよ。お尻の穴からこのお薬を入れるんだよ。」
「そんなの恥ずかしいわ。」
「いやらしい事をさせてくれるっていう約束だろう。」
「でも・・・」
「便秘でもないのに、そんなお薬なんて使って体に悪いことはないの。」
「害のない家庭用のお薬だからね。風邪ひいてない時に風邪薬を飲んでも、風邪にはならないだろう。それと同じようなものだよ。」
どうやら、冴子には浣腸の経験が無いらしい。
実際に使った時に、どんな効果が現れるのか知らないようだ。

実は、聖也は浣腸を使った事が有る。
大学時代、卒論を書いていた頃に、実験室にこもってばかりで体調を崩して便秘になったのだ。
当時付き合っていた彼女にその話をすると、飲み薬より浣腸の方が即効性もあって良く効くと言われた。
そして、その彼女は浣腸を買ってきてくれた。
「私も時々、便秘して使ってるの。あなたもこれを使えば、すぐにスッキリするわよ。」
そう言われて、自分で浣腸をしたのだ。 たしかに便秘は解消した。
だが飲み薬と違い、その即効性には驚いた記憶が有る。
『出来るだけ我慢してから排泄してください。』と書かれていたので、３０分くらいは我慢しなければならないかと思っていたら、数分で堪えられないくらいの便意の波が押し寄せてきて、どうにも我慢が出来ず

https://www.spacegaga.com/
SPACE銀河

に、出してしまったのだ。
あの時と同じくらいに良く効くのなら、しかも冴子がそれを知らないのなら、冴子のもう一つの恥ずかしい姿も観ることも出来るだろう。
あの頃は彼女が浣腸をしているなんていう事も特別気にもせず、便秘治療だと思っていたが、今冴子のお尻を観ながらこれから起こることを考えると、浣腸という医療行為のいやらしさを感じてしまう。
お尻の穴から何かを入れるという事は、ある意味それだけでエロチックな事でもある。
そんなことをあれこれと思いながら、聖也は冴子の肛門にイチジク浣腸をそっと挿しこむ。
「じゃあ、これからお薬を入れるね。『便意が来ても出来るだけ我慢してください』って書いてあるから、我慢するんだよ。」
「うん。私便秘じゃないから、大丈夫だと思うよ。そんなちょっとした薬だものね。」
この一本が冴子にどれほどの効果をもたらすのか、まだ経験の無い冴子は無邪気なものだ。
聖也はゆっくりとイチジク浣腸を押しつぶし、中の液体を冴子の腸の中に注ぎ込んだ。

「なんだか変な感じ。お腹の中に何か流れて来るのがわかるよ。」
「じゃあ、さっきの続きをしてあげるね。」
「私ばっかり、気持ち良くさせられて、何だかおかしいわね。あなたは気持ち良くならなくて良いの。」
「この後で、楽しい事をさせてもらうよ。」
そう言って、聖也は冴子の核や秘所を刺激する。
さっきの刺激と高みで敏感になっているのだろう。冴子はすぐに反応して息が荒くなる。
四つん這いで、後ろから刺激をされていたのに、冴子は膝が崩れて腹這いになってしまう。
聖也は、冴子を仰向けに寝かせて、M字に開脚させる。
うっすらと赤が滲んだ秘所の穴とその下の菊の蕾のような穴とが、縦に二つ並んでいるのが良く見える。
もちろん冴子は恥ずかしがって顔を手で覆うが、秘所の穴から流れ出す透明な粘液で冴子が感じていることは見て取れる。
しばらくそうして冴子に快感を与えていたが、冴子は達するまでにならず、聖也の手の刺激に戸惑っている。
「ねえ、お腹が変な感じなの。」

https://www.spacegingo.com/
SPACE銀河

「どんなふうに変なのかな？」
「あのね、ウンチがしたいみたい。」
「そうか。かんちょうしたからかな。」
「かんちょうって、便秘でなくてもウンチが出ちゃうの？」
「どうなんだろう、もっと我慢すればウンチしたくなくなるかもしれないよ。」
そんな会話を交わしながらも、聖也は冴子の破局が来る時を待っていた。
「ねえ、一生懸命我慢してるんだけど、どんどんお腹の痛いのがきつくなってきてるよ。」
「そうなのか。我慢出来ないくらいなの？」
「うん、もう無理。トイレに行きたくてたまらないの。」
「もうちょっと頑張れないかな。」
「ダメ。ここで洩らしちゃいそう。」
「それは困るな。じゃあ、トイレに行こうか。」
聖也は冴子をトイレに連れて行くと、蓋と便座を上げたままの便器に、冴子を逆向きに跨らせる。
冴子は限界が近いのか、聖也に誘導されるまま、水タンクに抱きつくような態勢で便器に跨る。
「ねえ、普通に座っちゃダメ？」
「この方が、君が出すところが良く見えるだろう。」
「出すところまで見るつもりなの？」
「そうだよ。我慢出来るなら、出さなくても良いけどね。」
「もう、すぐにでも漏れそうなの。我慢なんて無理よ。」
「じゃあ、出しても良いよ。」
「あなたに見られながら？」
「そうだよ。生理の血も見せてもらったし、ウンチをだすのも見せてもらうよ。」
「お願い。恥ずかしいから見ないで。」
「君の恥ずかしい処、恥ずかしい事を、全部見たいんだよ。」
「だって、ウンチだよ。」
「ウンチでも、オシッコでも、生理の血でも。全部。」
そう言っているうちに、もう冴子の肛門は中身を押し出す圧力に負けそうになっている。

https://www.spaceginga.com/
SPACE 銀河

「ああ、見ないで。恥ずかしい。」
そう言いながら、冴子は破局を迎える。

菊の蕾が内側からの圧力で綻びを見せ、その中心から注入した液が漏れる。
内容物の色を微かに反映して、薄い黄色に染まっている。
液の迸りに続き、菊の花がさらに大輪に咲き、固形物を産み落とす。
液が便器の水面を波打たせたところに、固形物が隕石のように次々と落下する。
固形のものが二つ三つと現れたのに続いて、柔らかな紙粘土のような排泄物が産み落とされる。
冴子は羞恥と便意の二つの感覚に苛まれ、顔を紅潮させている。
今は腸の中で暴れる嵐を静めるため、一刻も早くこの嵐を通過させようと、身体中で力んでいる。
そして嵐を体内から押し出し、菊の花が再び蕾に戻った頃、近くに在る別の穴からの水柱が便器の水面に向けて迸り、再び波紋を作る。
「ああ、おしっこまで出ちゃう。恥ずかしいから見ないで。」
そう言うと、手で顔を覆って、恥ずかしさのあまり涙を溢す。
「素敵なウンチとおしっこだったよ。」
「こんな恥ずかしい処まで見られて・・・」
「かわいい君のウンチだもの。君の全てを見ることが出来て、満足だよ。」
そう言いながら、聖也は冴子のお尻と秘所をトイレットペーパーで優しく拭いてあげ、レバーをひねり、便器の中の全てを水で流す。

「かんちょうすれば、こうなるって、最初から知っていたんでしょう?」
「さあ、便秘じゃないのにかんちょうするなんて、経験が無いからね。」
聖也はそう言ってとぼけるが、冴子には解ってしまっている。
「意地悪。こんな恥ずかしいことさせて。」
そう言って、冴子は泣きながら聖也の胸に飛び込んでくる。
二人で絡み合ってベッドに転がると、冴子は聖也のトランクスを脱がせてしまう。
二人共全裸になり、冴子は聖也の上に跨り、聖也のモノを自分の秘所に導く。

https://www.spacegaga.com/
SPACE 銀河

性的な興奮と未体験の羞恥の刺激で、冴子は貪るように聖也を攻める。
聖也も、冴子の羞恥の一面を見たことで異様に興奮していてそれに応える。
二人は上になり下になりしながら、狂ったように何度も快楽を貪る。
聖也は、後ろ向きになった冴子の秘所にモノを突き立てながら、指を菊の花の中心に抜き差しして、そちらにも刺激を与えるような事までした。
冴子は、いつもより大きな声を上げ、刺激に反応した。
やがて、快楽をむさぼり続けた二人は、深い眠りに落ちてしまった。

聖也が目覚めると、ベッドには聖也しか居なかった。
冴子の気配は何処にも無く、使用済みのイチジク浣腸が部屋の隅に転がっているのと、シーツに数か所、赤い染みが残されていなければ、昨夜の事は夢だと思ってしまったかもしれない。

その次の週末、聖也はいつものようにあの場所に向かった。彼女は居るだろうか？
ひどく恥ずかしい事をしてしまったから怒っているかもしれない。
もう、あそこに来ないかもしれない。居たとしても、どんな表情をしてるだろう。
何て言って謝れば良いかな。またセックスさせてくれるかな。
頭の中には、様々な想いが渦巻いていた。
半分は覚悟していた事だったが、そこに冴子は居なかった。
聖也はしばらくの間その辺りをうろついて、冴子の姿を探したが、やはり見つからず残念な想いで部屋に戻った。

部屋の鍵を開けようとした時、聖也は階段の陰に居る冴子に気付いた。
冴子は恥ずかしそうにうつむきながら、聖也の方に来る。
「あのね…ごめんなさい。何にも言わずに帰っちゃったこと。」
「いいんだよ、そんなこと。僕の方こそごめんね。あんなに恥ずかしくて酷いことをしちゃって。」
「いいの。いつもの倍の金額で買われたんだものね。」

https://www.spaceginga.com/
SPACE 銀河

そう言うと、冴子は涙を数粒浮かべながら、聖也の胸に飛び込んでくる。

「あのね。あんなに恥ずかしいことされたのに、とっても興奮しちゃったの。いつもよりも何倍も気持ち良くて、いっぱい逝っちゃった。」

聖也は驚いて冴子の肩を抱きしめ、うつむいた冴子を見る。

「だから…もうお金なんか要らないから、これからもいっぱいセックスしてください。」

「いいよ、喜んでしてあげるよ。僕の方こそ、させてください、よろしくお願いします。」

二人は見つめ合って微笑む。

「それで…」

冴子は再びうつむき、恥ずかしそうな表情を浮かべる。

「あなたに見られるのは、とっても恥ずかしいけど、すごく興奮しちゃうから…」

彼女は、言い淀む。

「時々、また、かんちょうしてください。」

聖也は冴子を抱きしめ、部屋の鍵を開け、冴子を部屋に招き入れた。

了

https://www.spaceginga.com/
SPACE 銀河